

流れを読む

グローバル経済は進む

荘銀総合研究所理事長 牧口 徳幸

昨年ロシアを訪れた。モスクワの目抜き通りにはヨーロッパ等の高級ブランド店が立ち並び、共産主義国家が倒れて豊かになったと思っただが、どうも違うらしい。一部の大金持ちも出てきたが、一般の人たちの生活は大変苦しくなったようだ。

ソ連邦崩壊以降、わずか十年余りで平均寿命(男性)は六十四歳から五十九歳と短くなった。これをどう解釈すべきか。共産主義国家では平等が建前であるため、国民生活は国家によって支援されていたが、それがなくなった事がまず考えられる。しかしそれよりも断然大きいのは通貨ルーブルの暴落であろう。共産主義時代の通貨価値を現在と比較するのは不可能だが、九八年の金融危機も含めるとルーブルの対外価値は数十分の一に下落したのではないか。冷戦の終焉でロシアはグローバル経済の中に投げ出されたが、それが一般の人々の生活苦となつてしまったのだ。

逆にグローバル化で繁栄し、将来への希望を拡大しつつあるのは中国、インドを中心としたアジアの国々である。まずインドだが、アメリカのシリコンバレーを中心としたIT革命で、予想もしなかったソフトウェアという成長産業で、国家発展の端緒をつかんだ。バンガロール等でEIT(イン

ド工科大学)を卒業したソフトウェア技術者は平均賃金の十倍にもなるというインセンティブが奏功し、経済全体のエンジンとして駆動してきた。

今やそれ以外の新しいサービス産業も続々と誕生しつつある。例えばアメリカとの昼夜逆の時差を利用して、アメリカで撮ったレントゲンをインドで診断して、アメリカに送り返すというビジネスが急拡大している。イギリスの植民地から解放されたインド十億の国民はようやくたくましい歩みを進めつつある。

グローバル経済の影と光を見てきたが、その推進の主役はアメリカと中国である。まず中国だが、ソ連が崩壊した九〇年代以降、日本の低迷を尻目に躍進し、その経済規模を三倍に押し上げた。この高度成長は北京オリンピック、上海万博に向かって続いている。

そして注目すべきは「世界の工場」から巨大な消費市場へと姿を変えつつある事である。その恩恵で日本はバブル崩壊後最大の景気回復局面を迎えつつある。昨年十一月期の成長率は年率六・四%となった。デジタル家電や半導体等のニューエコノミーだけでなく、鉄鋼、紙、パ等のオールドエコノミーも活況化し、世界的物流の激増から「船が足りない」という事態

となり、海運、造船も元気になってきた。日本の十倍、十三億人の経済が動き出すと、その影響は計り知れない。中国に内部的リスク要因はあるものの、グローバル経済化はこの巨象が押し進めていく。

一方のアメリカであるが、ITバブルの崩壊で世界経済大ピンチが懸念されたが、どうやら立ち直りつつある。〇四年の成長率は四%くらいとなり、その後も安定成長が続きそうだ。

問題はイラク戦争が泥沼化し、またまた蘇つてきた対外と財政の「双子の赤字」が懸念されているが、切り抜けていくと考える。樂觀視する最大の理由は、この国がオープンかつ弾力的であり、グローバル時代に強い適応性を持っている事だ。世界中から毎年百万人の意欲と能力に優れた移民が流入しているし、政治が間違えたと考えると大統領選挙等で「変化」を作っていく。グローバル経済の健全な発展のためには、「一極」ではなく、アジア、ヨーロッパ等の多極的構造になっていくことがむしろ望ましい。

グローバル化はどんどん進んでいく。日本の問題は、その中で国民の生活と安全を守る「政治」の遅れと硬直化である。